

魯迅と有島武郎

メイ・カンナン

「土香るラジオ文芸館」から一部抜粋してお届けします。今回は梅（Mei）さんです（2019年2―3月放送）

—はい、今月の「この人に聞く」は、この方です。

Mei みなさん、こんにちは。ニセコ町の国際交流員、メイ・カンナンです。

—簡単に、自己紹介をお願いできますか。

Mei 中国河北省保定市の出身です。中国の大学で日本語を勉強し、来日してさらに鳥取大学地域学研究科で2年間学び、京都で1年間仕事をしたのち、昨年4月にニセコ町に来ました。

—早速ですが、中国では有島武郎の知名度ほどの程度なんですか？

Mei 私は、大学で日本語学んだ時、有島武郎の名前を知りまし

た。大学で学んでいる人は有島武郎の名前を知っているかと思いません。でも中国の一般の人は、おそらく知らないと思います。

—メイさんは、有島武郎の作品をどれか読んだり、読まなくても作品名だけとかで、何か知っていますか

Mei 私は、魯迅が中国語に訳した「お末の死」や「小さき者へ」を読みました。魯迅が中国語に訳したこの二つの作品は、日本のことを研究している人であれば知っていると思います。

—魯迅が有島作品を訳している、というお話が出て来ました。これは、今日のメイントピックスとなる凄い話題ですね。

魯迅といえば、日本でも超有名な中国の作家ですが、お国の中国ではどのように受け止められている作家なんですか？

Mei 中国人なら誰でも知っている作家です。中国の社会に最も影響を与えた作家でしたし、今でも、小、中、高等学校の教科

書にも取り上げられているので、国民誰しも一度は読んだことのある作家ですね。

—それぞれの学校で、どんな作品が取り上げられるんですか？小学校ではどうですか？

Mei 小学5、6年生では「藤野先生」を読みます。

—えーっ、それはすごいですね！「藤野先生」は日本人の読者も特別の想いで読む作品ですが、魯迅が仙台で学んでいた時の恩師藤野先生との交流を描いた作品ですよ。中国人は子ども時代に、日本と縁の深い作品をまず読むんですか！

Mei 中国では多くの人が小学生の時に読むので、魯迅の仙台時代のエピソードを知っています。面白いことに、「・先生」というのは中国語では「・さん」というニュアンスなので、「藤野先生」は「藤野さん」と解され、大学の先生というニュアンスで受け止めなかった人もいますよ（笑）

—魯迅が日本に留学していた時、藤野先生にだけは良い印象を持ったけれど、他の日本人に対してはあまり良い印象を持てなかったようですね。中学校では何を讀んでますか？

Mei 「故郷」です。

—それもすごく興味深いですね。日本の中学生も、3年生になると「故郷」を読むそうですね。

Mei えー、すごいですね！中国でも3年生だと思いました。

—強烈な内容の作品ですよ。子ども時代の幼友達や、大人になつてから会つたら、自分の農場の小作人として身分が隔たつて、友情を確認できなかつた、という内容ですね。

日本では、「故郷」は1950年代から教科書に載つたようですが、調べてみたら、中国では1923年から教科書に載つたという記録を見つけました。この頃は、魯迅は中国政府と闘っていたはずなので、教科書に載っていたなんてすごい事ですね！

Mei 文学における魯迅の影響力が、それほど大きかったということだと思います。

—メイさんは、有島武郎とニセコの関係については、大学で学んでいたのですか？

Mei いえ、有島武郎の名前は、東京や札幌では聞いていましたが、ニセコとの関わりは知りませんでした。なので、ニセコに来て有島記念館を訪れた時、びっくりしました。しかも、ニセコで自分の農場を解放したと知って、驚きと尊敬の念でいっぱいになりました。

—すると、大学で学んだのは、作家としての有島武郎だったんですね。

Mei そうです。白樺派の作家であるということや、アメリカに留学したこと、軽井沢で心中自殺したことは学びましたが、ニセコで農場解放したことはここに来て初めて知りました。有島記念館があつた有島さんだったとは、当初思いませんでした(笑)

—魯迅が有島武郎の二作品を翻訳した時の背景などを調べてみたら、魯迅がこの2作品を翻訳したのは1923年で、有島武郎が心中自殺した同じ年のことだったんです。もちろん偶然ですが、因縁を感じますね。魯迅が有島のこの二作品を翻訳したのは、

全作品の中でも彼の問題意識に合致したから選んだと思うんです。メイさんはこのことについて、何か思い当たることはありませんか？

Mei 有島武郎のこの二作品を私も中国語訳で読んで、魯迅の思想性と近いものを感じました。

—それはどういうことですか？

Mei 魯迅は中国の古い政治や社会と闘う思想の持ち主でしたが、社会の底辺で生きる人々への共感をもとに、そのような社会を変えようという想いに基づき生き方をした人です。そのような社会を変えていく力を、子ども達への想いに託した作家だと思

います。「お末の死」「小さき者へ」にもそのような思いが描かれてるので、魯迅と有島武郎の類似性を感じます。

—なるほど、確かに特にこの二作品はそうですね。仙台の大学に留学した魯迅が医学部から文学部に専攻を変えたのも、文学によつて中国国民の意識変革を図ろうとしたからですね。

Mei 当時の日本は西洋化が中国より進んでいたもので、そのような時代背景が強調された有島作品は中国の一般の民衆に理解されにくかったけど、有島の2作品に見られる底辺の人々の暮らしぶりや子どもたちに託したい思いは、中国の読者にとつてもわかりやすかったと思います。

—有島が「小さき者へ」や「お末の死」の中で子どもに託した想いは、大人のミニチュアとしての、つまり大人の未完成段階としての子ども、ということではなく、独立した独自性を持つた人格としての子ども、ということでした。そのような子ども

が大人を超えて成長し新しい時代を築いてほしいという有島の思想は、魯迅が中国国民の意識改革を進める上で非常に参考になったでしょうし、そのような有島の思想に魯迅は大きな影響を受けた可能性を感じますよね。

魯迅が日本に留学したことで有島武郎の文学に出会ったように、日韓併合後の韓国の知識人も有島武郎の「小さき者へ」などから大きな影響を受けて、韓国語に翻訳しています。

Mei えー？、それはびっくりですね！ 有島武郎を軸にして、日本と中国、韓国の文学者は、共通した問題意識をもっていたんですね！

—アジアの国々で有島武郎の思想が大きな広がりを見せていたことをメイさんのトークの中で知り、確認することができました。今後も、魯迅には関心をもち続けていきたいと思ひます。ありがとうございます。

(※トークの一部を掲載しました)